



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



主の平和のうちにいきましょう

主任司祭 小西 広志 神父

司祭は、気の弱い存在です。ですから、教会に来る人の数をしきりに気にします。しばしば、ミサに来た人の人数を司祭同士が確認し合うことがあります。復活祭の受洗者の数をお互いに披露し合うこともあります。いつでしたか、ある夏の終わりに、先輩の老司祭から、今年の夏のキャンプに子どもたちが何人来たかを訊ねられたことがありました。ごく少ない人数を正直に言うと、わたしの時は何十名来ましたと勝ち誇ったように言われました。そのごく少ない子どもたちをキャンプに誘うのにも四苦八苦したわたしとしては、いたたまれない気持ちになりました。数は残酷です。もし教会に集う人数だけで比べられたら、現代の教会は立つ瀬がありません。

確かに教会に人が来るのは素直にうれしいものです。教会を通じて人と人との交わりが生まれていくのもうれしいものです。しかし、よく考えてみると、教会に人がたくさん来ることには落とし穴が仕組まれているようにも思います。つまり、教会に来た人だけが、よい人、信仰のある人だと錯覚してしまうことです。あるいは、教会に集まった人だけでの交わりが生じて、それ以外の人を受け入れないという危険性があるからです。

近頃、わたしは、教会に集まる人の多い少ないで一喜一憂しないように心がけています。反対に、ミサを終えて教会から帰って行く人々のことを気にかけています。ミサを終えて、皆さんはどこへ行くのでしょうか。ある人は、お買い物をして帰るでしょう。ある人は、休日ではかできない用事を済ますことでしょう。ある人は、急いで家に帰って、高齢の家族のお世話をすることもかもしれません。ある人は、平日の仕事で疲れた表情を隠しながら、近所の奉仕活動に参加しなければなりません。子どもたちは、学習塾へと急ぐかもしれません。あるいは、野球やサッカーなどの活動へと駆けつけるかもしれません。それぞれの日曜日の過ごし方があるのです。

ミサを終えて、教会の門から出て行かれる方々を見送って、「よい日曜日となりますように」という祈りが心に浮かんでいきます。

「ミサ聖祭を終わります。いきましょう、主の平和のうちに」と呼びかけられて、「神に感謝」と応えてミサが終わります。何度も耳にした呼びかけと応えですが、じっくり考えてみると、なかなか手強い言葉が並んでいます。「いきましょう」は、日本語では呼びかけの表現に聞こえますが、実は「あなたがたは行きなさい」の意味です。つまり、呼びかけ、誘いではなくて、命令形なのです。それは、復活したイエスさまが命じられたからです。イエスさまは命じる方です。いえ、聖書が示す神さまが命じる方です。「行きなさい」という命令が聖書の中に何回登場することでしょうか？ わたしたちは、神さまはおやさしい方だから、なんでもゆるしてくれる方だからと勝手に思い込んでいます。いえ、神さまは人間の日常生活の中で言葉を通じて命じる方なのです。つまり、神さまはわたしたちの生活に入ってくる方、介入してくる方なのです。その命令に心えるところから、わたしたちの信仰の歩みが始まります。

「平和のうちに」は、日本語として座りの悪い、落ち着かない表現です。わたしは子どもの頃、「平和の家」だとばかり思っていました。しかし、教会に平和があるはずですから、どこか別な平和があるところに行くのはおかしいと考えたのは、ずいぶん後になってからです。それから、つい最近まで「平和のうちに」とは、ミサの中でいただいた主キリストの平和が失われないうちに、壊れないうちという意味で理解していました。確かに、せっかくミサでお恵みをいただいても、すぐにそれを失ってしまうのが人間の常です。だからせっかくの主の平和が壊れないうちに、急いでいきましょうの意味で捉えていました。本当につい最近まで。

「平和のうちに」は、そんな意味ではないことにやっとながかりました。つまり、これは「平和のおかげで」、「平和によって」の意味なのです。（それを解き明かす鍵はミサの原文の一つの前置詞にあるのですが、そのことについてはいつかお話しすることがあるでしょうから、ここではもう触れません）。復活したイエスさまが、ユダヤ人たちに脅えて一所に隠れているお弟子さんたちに最初に与えたのも「平和」でした。「あなたがたに平和があるように」。復活したイエスさまは、ミサの中にもおられます。そしてミサに参加するわたしたちに「平和」を与えてくださいます。これは、わたしたちが優れていたから、お利口さんにしていただいていたから褒美でいただいたものではありません。復活したイエスさまに満ちていた父なる神さまからいただいた「平和」を惜しみなくわたしたちに分け与えられるのです。そんないただいた「平和」のおかげで、それぞれが生きている現実へと帰って行けるのです。もしくは「平和」に支えられ、「平和」によって出かけていけるのです。そうでなければ、わたしたちの生きている現実には厳しく、つらいもので、自分の力だけでは生き抜いていくのは無理なのです。

「いきましょう、主の平和のうちに」とは、「（あなたがたは）出かけて行きなさい。恐れずに、戸惑わずに出かけて行きなさい。なぜなら、わたしはあなたがたにミサの中で平和を与えたのだから、わたしはあなたがたといつも一緒にいます」というイエスさまの思いがこもった命令の言葉なのです。それに対して「神に感謝」と応答します。「神さま、平和がいただけて、出かけられるはあなたのおかげです」という意味が込められています。

司祭は、教会に来た方々の人数に感嘆されてはなりません。むしろ、「神さまはイエスさまを通じていつもあなたと一緒にいるんですよ、だからがんばってくださいね」と人々を送り出さなければならないのです。そして、皆が帰って誰もいなくなった聖堂で、祈りをささげるのです。教会に来ることのできた人のためにも、来られなかった人のためにも。信徒も同じです。教会に集ってワイワイとするのも楽しいでしょう。その交わりは尊いものです。しかし、もっと大切なのは、ミサの中でいただいた「平和」を、勇気をふるって、自分の身近な人々に分かち与えることなのです。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、教会に集うことができなくなりました。教会の活動も様変わりしました。しかし、「いきましょう、主の平和のうちに」に託された復活したイエスさまの思いをしっかりと刻んでいけば、これからの新しい教会のあり方も見えてくるのです。